

species and route of administration.

111. Quinoline発癌における動物種特異性に関する研究

小木曾正, 篠原良孝, 村崎元五, 水谷晶彦, 伊東信行
(名古屋市大・医・第一病理)

我々は, ラット肝に対する Quinoline の発癌性を明らかにするとともに, その特性を種々の観点より追求中である。今回, Quinoline に対する各種動物の感受性の差異について検索したのでその大要を報告する。

Wistar 系ラット, ddy 系マウス, Hartley 系モルモット, Syrian golden 系ハムスターのいずれも雌雄8週令の動物を用い, Quinoline を0.2%の割合で粉末飼料(オリエンタル M, NM 及び R) に混じて30週間投与観察の後, 屠殺剖検し, 病理組織学的に検索した。尚, 26週以後に死亡した動物も有効とした。

その結果, 肝血管内皮腫の発生は, ラットの雄で11/15 (73.3%), 雌では7/22 (31.8%), マウスでは雌雄いずれも8/10 (80%) であったが, モルモット, ハムスターにはいずれも認められなかった。尚, ラット雄の3例と雌の1例に肺転移を認めた。肺細胞癌は, ラットでは, 雄に2/15 (13.3%), 雌に2/22 (9.1%), マウスでは, 雄に1/10 (10%) に見られ, ラット雄の1例に肺への転移を認めた。肺結節性肥大形成は, ラット雄で7/15 (58.3%), 雌で14/22 (63.6%), マウスでは, 雄で1/10 (10%), 雌で2/10 (20%) に見られ, ハムスター, モルモットには認められなかった。

以上の実験結果より, Quinoline が, ラットとマウスの肝に特異的に作用し, 発癌性の出現することを明らかにしえた。しかも, ラットでは, 雌よりも雄により感受性のあることが見出された。モルモット, ハムスターには発癌性がなく, 他の発癌物質と同様, 動物種属差, 雌雄差が, Quinoline にも存在するなど, Quinoline 肝腫瘍の特性の一端が明らかとなった。

112. QUANTITATIVE ANALYSIS OF SERUM AND TISSUE LIPID COMPONENTS IN EXPERIMENTAL LABORATORY ANIMALS

III

Analytical Method of Non-Polar Lipid And Its Practical Application

I. HORII, N. SHISHIDO and K. UDAKA

(Department of Toxicology & Pathology, Nippon
Roche Research Center, Kamakura, Japan)

In continuing the study reported in the last meeting (1, 2), the method for the isolation